

皮膚とシャツ

渡部 望

Nous ne savons pas distinguer la peau de la chemise.

Michel de Montaigne

モンテーニュは職業は喜劇に似ていると書いている。与えられた役割はりっぱに演じる必要があるけれど、それはあくまで借りものの人物としておこなうものだ。役割は役割にすぎず、いわば舞台の上の仮面や衣裳のようなものであって、それを自分の本来の姿と混同してはならない。ところが、「われわれは皮膚とシャツとを区別できないのだ」とモンテーニュは言う。そういわれてみればそうかもしれない。われわれのまわりには会社の肩書きをふりまわしてひんしゆくをかう人や、商売上の謙虚さを身につけすぎたせいで性格まで卑屈になってしまったような人がいる。ことに日本には多いような気がするの、湿度が高いせいでシャツが肌にまとわりつくからだろうか。いや、そうした輩は 16 世紀のフランスにもたくさんいた。モンテーニュは新しい任務につくと顔つきが変わったり、「僧職につくと、肝臓や内臓までもそうになってしまい、その職務を便所にまでひきずって行く人」を目撃したと証言している。だとするとこれは普遍的な人間の性というべきなのであろうか。だが、モンテーニュはこう付け加えている。「わたしの場合、市長の職務とモンテーニュ個人とは、ひじょうに明瞭な区別によって、いつもふたつに切りはなされていた。」

モンテーニュは 37 歳でボルドー高等法院を辞し、私人に戻ってシャトーにこもり、読書と自己探求とエッセー執筆に専念するのだが、11 年後の 1581 年、ボルドー市長に選出され、ふたたび公職に呼び戻されることになる。今参照している『エッセー』第 3 巻第 10 章は、その市長職を二期 4 年間つとめおえた頃に執筆したものであり、ボルドー市長在任時をふりかえりながら、人間と仕事のありようについてあれこれ考えを巡らせている箇所である。それでは、市長の職務とモンテーニュ個人がふたつに切りはなされていたというのはどのようなことを指しているのでしょうか。

モンテーニュが市長職について最初に行ったことは、自分がどのような人間であるかを「ありのままに、忠実にまた心をこめて説明」することだった。市の職員に向かってかれは言う。自分は「記憶力はなく、警戒心はなく、経験はなく、活力も

ない。憎しみの心もないが、野心、貪欲、また乱暴さもない」。また自分が市長に選ばれたのは、かつて父親が同じボルドー市長として立派につとめていたことが唯一の理由であろうが、わたしは老いた父が「おおやけのわずらわしい仕事でひどく心をいため」ていたことをよく覚えており、「このような生き方は、他人のなかにある場合わたしは称賛するが、わたしがそれを自分で守っておこなってみようという気はとてもない」と。これは就任した市長の最初の言葉としては驚くべきものである。前半の「わが身の浅学非才」を認める弁はよく耳にするが、それは「全力を傾注いたす所存でございます」と続くのであって、父親のように健康も忘れて献身する「気はとてもない」という台詞は聞いたことがない。モンテーニュは儀礼的謙譲のトポスをなぞっているのではなく、自分の皮膚に合わないシャツは着ないと宣言しているのである。「他人にたいして自分を貸してやってもよいが、自分を与えるのは自分自身にたいしてでなければならない」という思想を表明しているのである。思想家モンテーニュの面目躍如と言うべきだろうが、はたしてこれはよい市長だと言えるのだろうか。

モンテーニュ市長がどのような働きをしたのか。怠惰な『エッセー』愛読者に過ぎない私は堀田善衛の『ミシェル城館の人』を通じてしか知らないのだが、それによると彼はりっぱに市長役を演じきったようである。市長任期の第二期(1583~1585)に第8次宗教戦争、いわゆる三アンリの戦いが勃発する。国王アンリ三世、神聖同盟首領ギューズ公アンリ、王位継承者ナヴァール公アンリの対立が先鋭化し、新教徒の勢力が強かったフランス南西部では激しい戦闘が繰り広げられた。そうしたなか、モンテーニュはボルドー市の治安維持と防御になかば軍人として活躍するかたわら、王室とカトリックとプロテスタントの陣営の仲介役という重大な、しかし神経をすり減らす、そして実りの少ない任務に取り組んだ。だから彼は「私は、ひとが、自分のひきうけた任務のかずかずにたいして、配慮すること、奔走すること、ことばを費やすこと、そして汗を、また必要な場合には血を流すことを拒絶するのを望まない」と自身の覚悟を記すことができたのだ。とはいえ「しかしそれは、貸し出す行為として、たまたまそうなったこととして、おこなわれるべきなのだ」と付け加えることを忘れない。ここで私は当惑する。このふたつはいかにして併存しうるのか。荒木昭太郎氏はこの箇所を注釈して、「モンテーニュの公務にたいする献身の覚悟が語られる。ただしそれは、個人の安定した生活に無理なく結びつけられるべきものとされている」と記しているのだが、はたしてそうだろうか。モンテーニュは矛盾を恐れぬとはよく言われるが、さすがに命を投げ出す覚悟と「安定した生活」とは両立しえないだろう。いかに臨時の貸し出し行為であるとはいえ、そ

の職務遂行に肉体的な危険が含まれていることは覚悟しなくてはならないのであるが、それでもなお守るべき「モンテーニュ個人」があるとすればそれは精神の自由としか考えられないのではなかろうか。わたしはここにストアのモンテーニュを見る。

だがエッセーの筆は立ち止まることなく動き続ける。皮膚とシャツのテーマは別の変奏を奏ではじめる。モンテーニュはこう言う。「論議の中心の点は別にして、わたしは精神の中正さと純粋な無関心のなかに自分の姿勢を保って今日まで来た。」「このことについてわたしは自分で喜んでいる。なぜならば、一般に、ひとがこれと反対の行動をとって失敗しているのを見ているからだ。」つまり仕事で成功するには「無関心」が必要だということである。これはどういうことか。モンテーニュはチェスやポーム遊戯に喩えてこう説明する。激情にかられた欲求によってはげしく熱狂して身をいれると、混乱してしまう。「ゲームにたいしてしつこく頑張り熱をいれることがすくなければすくないほど、かれはよけい有利にまた確実にそのゲームを運んでいけるのだ」と。つまり頑張りすぎるとうまくいかないのだということである。

ここでモンテーニュは王室と神聖同盟陣営と新教徒陣営との交渉にあたったときの経験を物語っている。彼らの和解を困難にしているのは、それぞれの陣営の宗教的熱狂あるいはむきだしの政治的野心であった。つまり野心、利害、憎しみ（これらは願い、希望、正義と美しく翻訳することができる）といった本来個人的な感情が和解を妨げていたのである。和解というおおやけごとが感情というわたくしごとによって阻害される。これを喩えて言えば、皮膚にぴったりしすぎるシャツを着ると、余裕を失い、身動きがとれなくなってしまう、というということになるだろう。ここでは政治哲学者あるいは精神の政治思想家としてのモンテーニュが顔をだしていると言ふべきであろう。

以上は、大学が市民向けに開いている公開講座でした話の概要である。熱心に話を聞いてくれた聴衆のひとり「会社で働いていたときにこの話を聞いたかったですな」と笑って言った。彼はすでに退職して年金生活を送っているらしかった。たしかにモンテーニュの『エッセー』は誰が読んでも面白いだろうが、個人的生活と職業的生活の両立に悩んだり、職場での派閥対立や人間関係の難しさに日々直面している人にとっては単に面白いという以上に、切実な書、知恵と勇気を与えてくれる書であろう。

引用はモンテーニュ『エッセーⅢ-社会と世界』（荒木昭太郎訳、中央公論新社、《中公クラシックス》、2003年）によった。